

逆転の発想で安全を追求した車いす

通常ならば、車いすはブレーキを握ると止まります。当たり前ですね。しかし、車いすを押す人が坂道でうっかり手を離したら、大事故につながるかねません。老老介護の現状を見ると、こんなうっかりは、ますます増えてくるでしょう。

そこで、通常はブレーキがかかった状態。レバーを握って、初めて動き出すという新発想の車いすがあります。カワムラサイクルの「忘れ騎士(ナイト)」(写真)です。

まさに逆転の発想。世界中のベビーカーも、こうするべきですが、開発者は、駅ホームの転落事故の多さを嘆き、この逆ブレーキを思いついたようです。

同社は高級自転車で有名でしたが、阪神・淡路大震災後に車いす分野に進出してきた若い会社。言葉は悪いですが、介護については後発集団。だからこそ常識にとらわれず、柔軟な発想ができたのです。もちろん、元は自転車会社ですから、アルミフレームを使って軽量化するなど、自転車製造の技術が随所に見られます。

逆転の発想は、かつて日本の

お家芸でした。コンパクトカーは、体の小さい日本人だからこそ思い付いた。任天堂を引っ張

知って当りの前 介護ガイド帳



上原喜光



るゲーム機「Wii」も、高性能競争からあえて身を引き、子どもから老人までく誰でも楽しめる簡単なゲーム」という逆転の発想で開発されたそうです。

厚労省の試算によると、10年後に介護産業は全体で19兆円市場に発展します。しかし、今は福祉施設への雇用など介護サービス分野ばかりが注目され、介護用品や介護機器などは二の次。サービスが6兆円市場といわれる中、その市場規模も業界団体の推計で1兆2000億円(08年度)ほどしかありません。国の後押しさえあれば、やがて有力な輸出産業として成功するはずだ。

政府や役所も、逆転の発想が大事です。

(全国介護者支援協議会会長)